



Title	万葉集の巻序についての一考察：巻七周辺の巻序をめぐって
Author(s)	山田，浩貴
Citation	国語国文研究, 129, 16-28
Issue Date	2006-01-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93540
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_129-16-28.pdf



万葉集の巻序についての一考察

——巻七周辺の巻序をめぐって——

山 田 浩 貴

一

従来、万葉集の巻序に秩序があるのかないのかについては議論がある。数巻といった部分のレベルではそれなりのまとまりが見られるという指摘は支持を得ていても、全体として見た場合秩序だったものとはいえないという立場の論者も多い。

例えば、集中で巻序について最もはっきりしている部分といつてよい巻一から巻四までについては、雑歌、相聞、挽歌の三大部立を構成する巻一、二のまとまりがあり、それに続いて、その拾遺的な存在である巻三、四のまとまりが置かれているという理解が支持されている。また、巻十七以下の末四巻は、部立を持たず、時代も他の巻に比べて下ることなどにより、古くから、他の巻に対して付録的であり、そのために集の末尾に置かれていとされている。しかし、これらのように明確な秩序を示せ、しかもそれが大方の支持を

得ている部分は他にはあまりない。そうなると、やはり万葉集全体の巻序には秩序はないということになってしまう。

事実、万葉集では、小さなまとまりさえ作っていないように見え、前後の巻との関係が不明なまま孤立しているように見える巻もある。その一つが本稿で扱う巻七である。その詳細は後で述べるとして、このような巻の存在が巻序を秩序だったものと考えづらくしているということができよう。しかし、秩序がないといえるのは、あらゆる巻序の可能性を排除した後でしかできないことである。従って、まずすべきことは、数巻によるまとまりといえるものが他に見当たらないか考察することである。本稿はこのような目的の一環として、巻七を中心に、その周辺の巻を視野に入れ、巻七周辺の諸巻にまとまりを見出せないか考えるものである。

なお、本稿で述べられるのは巻七を中心とした部分についてのみであり、全体の巻序を明らかにするためには部分のみの論では十分であることは承知しているが、全体像解明のための積み重ねの一

つとして、これにより、全体への足がかりが得られればと思う。

二

巻序に秩序があるならば、ある巻の位置は他の巻との関係により決められるものはずなので、巻序の考察にはある巻のその周辺の巻との関係のあり方がポイントになる。

具体的にどのような基準により、まとまり、巻序の整合性の認定がなされるかを先述の巻一から巻四の四巻を例に見てみる。まず、巻一と巻二は時代をほぼ同じくし、両巻で三大部立を完備するという補完性を持つことからひとまとまりと見られる。また、同じくそれに続く巻三、四も中心的な時代が同じで、三大部立を完備するという共通点によりひとまとまりと認定されている。そのうえでこれから四巻全体を見ると、いずれも当該時代における公的な歌が多く、さらに、巻三、四は巻一、二と同時代の歌も含むが、それより時代が下る歌もふくむことにより、この四巻全体も密接な関係にあるひとまとまりと認定でき、巻序のうえでの整合性が指摘できる。

このように、基準としては、時代、部立、歌の性格などがありえる。しかし、さまざまな基準を当てはめてみても、巻七はなかなか周辺諸巻とまとまりにすることが困難なようである。それでも、巻七周辺をひとまとまりとみようとすると論も従来出されているので、まずは従来の巻七の巻序に関わる論について見ておく。

巻七は従来それより後置されている巻とでひとまとまりであると見られることがあった。その代表的なものは伊藤博氏の論である。

氏は、巻七から巻十の四巻について、主に「常体朝臣人麻呂歌集」を権威とする「古今構造の歌巻」であるとし、「連れ立つ巻七〜十が結果として同一次元での成立であることは論ずるまでもない」と述べる⁽¹⁾。氏は人麻呂歌集歌を重視するという編纂姿勢をまとまりを認定する基準としたのである。

巻八には人麻呂歌集出歌とされる歌はないが、伊藤氏は巻八編纂時に人麻呂歌集の影響があったとする渡瀬昌忠氏の見解に従い、このことを問題にしない。だが、これに対しては、身崎壽氏による、そのような考え方は編纂過程論であり構造論としては有効ではないという的を射た批判もある⁽²⁾。

ところで、伊藤氏が、右のような難を持つ人麻呂歌集という要素を出して当該四巻をひとまとまりと見ようとしたのも、そもそもこの四巻には格段の共通点があるわけではないという背景があると思われる。まず部立は、三大部立の巻九、「雑歌」、「譬喩歌」、「挽歌」の巻七、四季分類優先の巻八、十というように混在している。また、作者情報をほぼ完備する巻八、中途半端な巻九、出典注記以外には多くは作者情報を持たない巻七、十といった違いもある。

もちろん、これらの違いは、各巻が相補的な役割を果たしていることから来る違いである可能性もある。しかし、それなら、その順序に何らかの秩序があるべきだろう。だが、部立、作者情報を記す度合いなど、何らかの基準となりえるようなものを考えてみても、四巻の順序に秩序を見出すことは難しい。当該四巻を一団と見る伊藤氏も、巻序については後考をまっつ必要を認めている。

また、伊藤氏が残した巻序の問題を補う意味も持つ身崎氏前掲論

文は、巻八、十という斬新な四季分類歌巻が万葉集に参入するために、「記名性」と「三部立制」という「既成原理」を持つ巻七、巻九がそれぞれ巻八、巻十に先行したと理解する。だが、巻七は集中初の作者情報不記の巻で、もし「既成原理」が求められたならば、中途半端ではあるが「記名性」を持つており、形式的にも題詞を持つ歌が多い巻九を先行させた方が「既成原理」からの抵抗は若干減少するのではという疑問もあり、やはり四巻の順序を考えるのはなかなかの難問である。なお、氏の巻七に関する最新の論では、巻七を当該四巻中でも、以前の六巻とは異なる「あたらしい展開の意図を明確に持った歌巻」とする。そして、そのため当該四巻を「先導」しているとする。巻七の性格付けは大変難しい問題だが、巻七が先頭にある理由はそれと認めるとしても、巻八以降の巻序については述べられていないため、やはり、巻序という点では問題は残されている。

すると、巻七以下四巻をまとまりと見るには材料不足ということになる。だが、それにもかかわらず四巻をまとまりと見、巻七を後置の巻と強い関係にあると見るのには、巻七と巻十のあり方に対する従来の理解の影響が大きいと思われる。例えば、伊藤氏の論の進め方が、巻七と巻十の対応を先に論じ、その後巻八、九を取り上げていることにもそれは表れている。つまり、四巻をまとまりと見るのは、巻七と巻十が相補的な関係にある強い結びつきを持った存在なのだから、その間に挟まれた巻八と巻九も巻七や巻十と深い関係にあるのではないかという消極的な論じ方の結果であり、巻七と巻十のあり方の理解がそのほぼ唯一の大きな支えともいえるのである。

巻七と巻十については、古くは真淵の「今の七と十の巻は、哥もいさゝか古く、集め體も他と異にて、此二つの巻はすがたひとしければ、誰そ一人の集め也」という発言があるが、今日までの両巻に関する議論は、概ねこの発言を詳細に論証する方向で行われてきたといえる。確かに、巻七と巻十は共に作者不記の巻であり、人麻呂歌集歌を多く部立、分類の先頭にあげる。一方、巻七と巻十は部立が異なり、巻七が「雑歌」「譬喩歌」「挽歌」、巻十が四季分類の下に「雑歌」「相聞」という形である。これは無季、有季の別と考えられ、巻七に無季の歌を、巻十に有季の歌を振り分けた結果と理解されている。ここから、巻七と巻十を相補的な存在とし、極めて密接な関係にあるとする見方が生まれる。

だが、このような理解は本当に従いうるものだろうか。特に巻序という点から考えると、巻七と巻十が無季、有季という相補的な存在ならば、なぜその間に巻八、九があるのかという問題が出てくるのである。そこで考えたいのが、巻七を無季の巻と捉えるということとは果たして適切かということである。巻十の部立は巻十が有季の巻であることを宣言するものと考えられるが、巻七を無季の巻と捉えることには疑問の余地がないのだろうか。

万葉集全体を見ると、このような疑問の理由が明らかに思う。横井博氏が示した各巻の季節歌、季の詠物歌の歌数一覧⁽⁵⁾によると、巻七は十九首の季節歌を含み、それは全歌数の五%に当たるとされている。なお、何をもって季節歌とするかは大変微妙な問題であるので、一々の数値は論者によって差が出るだろうが、ここで必要なのは大体の傾向である。論者によって数値に差が生じる可能性

はあるが、その差は大体の傾向を示すという点では許容できる範囲だろうという見通しのもとで横井氏の数値を引用した。なお、他に村瀬憲夫氏は巻七において季節歌と思われるものを二十首としている。また、本稿の試算でも巻七の季節歌は二十首から三十首程度になると思われる。従って、横井氏の数値は偏ったものではないといえるだろう。

従って今は横井氏の数値により進むことにするが、確かに巻七には季節歌は少ない。しかし、これを他の巻と比べると、巻一や巻二、巻十三といった有季、無季といったことは関係のなさそうな巻でも季節歌の割合は七〇八%となっていて、巻七の五%と大差ない。

以上は事実の指摘であるが、問題はこの先にある。横井氏は巻一などを「古撰」とし、季節歌の少なさの由来を「古撰」であることに求める。一方、巻七は「非季節歌巻」とする。これは従来の理解、つまり、巻七に対しては巻十があるからという考え方によるのだろう。しかし、配列の上では巻七と巻十は隣り合わせになっているわけでもなく、両巻が関連付けられるものであることは集中のどこにも示されていないので、それは先入観によるものであつて、今巻十の存在を一旦置けば、巻七は巻一などと同様に考えられる可能性もあるのである。つまり、巻七が無季の巻であるということはそれほど確実なことではないのである。そうすると、巻七と巻十を相補的な存在と見ることも自明のことではなくなり、さらに、巻七以下四巻を一团と見るための大きな根拠も疑わしいものとなる。

巻七と巻十を相補的な存在と見ることは、その間の巻八、九も含んだ四巻をひとまとまりとする見方に進んでいかざるをえなかつ

た。しかし、四巻の性格、順序に秩序を認めることは難しい。だが、そもそもその困難さは四巻をひとまとまりと見ようとしていたことから起因した問題のはずである。巻八や巻九の位置も、巻七と巻十を相補的な存在と見る時には困難な問題であるが、周辺の巻々も含めて別の見方ができるなら、それほど困難な問題ではなくなる可能性があるのである。

三

そこでまず考えてみたいのが巻七と巻六の関係である。既述のような先行研究とは逆に、巻七の前方に目を向けてみる。後方が困難ならば前方に目を向けてみる必要があるだろう。

古く宣長の『万葉集重載歌及巻乃次第』に指摘されているように、巻六は巻一「雑歌」を時代的に継ぐ公的な雑歌集である。すると、巻六と巻七は作者情報の有無という点で大きく違うが、意外に近い面を持ち合わせている。一番巨視的なのは「雑歌」を中心とするという点である。巻六は「雑歌」のみの巻であり、巻七は「雑歌」「譬喻歌」「挽歌」から成るが、歌数は「雑歌」が二八首、「譬喻歌」が一〇八首、「挽歌」が一四首であり「雑歌」が三分の二を占める。もちろん、この数字に意味があるかどうかは、他の巻との比較を経る必要があるが、巻七より前の六巻において、「雑歌」の歌数は他の部立に対して圧倒的に多いわけではない。むしろ、巻一に対して巻二があり、巻三に対して巻四があることを考えると、「雑歌」の歌数はあるグループ内の三分の一程度に抑えられている。なお、集全体

では巻九で「雑歌」が三分の二程度と多いが、その他は「雑歌」の割合が目立って多い巻やグループは見当たらない。このことから、巻七のこの「雑歌」の多さは、両巻の共通点として取り上げてみてもよいと思われる。

なお、これは巻一、二のような部立を相互に補完するというところではない。しかし、例えば従来、非常に密接な関係にあるひとまとまりとされている巻十一、十二では、部立の構成が共通していることもひとまとまりとしての認定基準にされている。従って、部立が共通していることもまとまり認定のための要素として考えてもよいのではないだろうか。

もちろん、単に部立の構成が似ているというだけではまとまりを認定するには弱い⁽⁸⁾が、既に身崎氏も指摘しているように、その「雑歌」の中で両巻共に旅の歌が目立つことが注目される。但し、森本治吉氏が指摘するように、万葉集の「雑歌」は「旅の歌が其大部或は半を占むるが大體の傾向」ということもできる。ただそれでも、巻六では冒頭の九〇七番歌から吉野行幸歌で、従来も多々指摘があるように、少なくとも九五四番歌までは行幸供奉の歌がほとんどを占める。その後も公的なことに関わる中央以外での歌が散見され、巻末には「過敏馬浦時作歌」(二〇六五〜七)がある。従って、全体的に旅の歌の集という印象は作歌明記の「雑歌」中でも特に強い。

一方、巻七「雑歌」は、小分類名「芳野作」「山背作」「攝津作」「羈旅作」により旅の歌であることが明確なものが一三〇〜二五〇番歌の一二一首あり、「雑歌」全体の半数以上を占める。また、これらのような旅に関わる小分類を持つことも、巻七「雑歌」が旅の歌の

集という側面を強く持つことを示すように思われる。万葉集の作者不記巻「雑歌」で「地名」作⁽⁹⁾のような旅での詠であることを明確にするような個所は他には無い。

また、他にも「右一首伊勢従駕作」という左注を持つ一〇八九番歌(後述)や一〇三〜六番歌(この場合は吉野作)などのように、分類名は単に「詠」というようなものでも旅の歌といえるものを加えれば、旅の歌の巻七「雑歌」における比率はさらに増える。森本氏は旋頭歌部以外はいずれも旅の歌が中心であると⁽¹⁰⁾し、巻七「雑歌」の名称は「雑歌」よりも「雑部羈旅の歌」が適当であると⁽¹¹⁾するほどである。

但し、既述のとおり、一般的に「雑歌」に旅の歌が多いことは否定できない。特に、やはり旅の歌が多くを占める巻として巻九がある(森本氏や金井清一氏など)。従って、巻七は巻九とも共通点を持つことになり、巻六と巻七の関係を取り上げている本稿にとつては気になる存在である。だが、本稿は今の巻序を理解することを目的とするものであり、今の巻序以外はいらない⁽¹²⁾ということを述べる⁽¹³⁾ことが目的ではない。つまり、巻六の次に巻七が来ることの説明として、巻六と巻七の共通点を材料としようとするのが目的なのである。旅の歌という共通点が巻七と巻九の間にあてはまっても、それが巻六と巻七の共通点を否定するわけではないし、ましてや、巻七と巻九とは巻序の点で隣接しているわけでもないから、その共通点は認められるとしても、それが巻序においては有効性を持っていないのである。

さて、本筋に戻るが、身崎氏論は既述のとおり巻七の旅の歌とい

特徴を取り上げ、「そこに直前の巻六との接点というものが見えてきはしないだろうか」という。本稿が注目したいのはまさにこのことであり、その点で氏の指摘は非常に重要である。ただ、氏はその後、他に旅の歌の多い巻として巻十二があることに話題を移し、巻六、七、十二という一連に羈旅歌への志向の流れを見ていく。しかし、単純な巻序論を目指す本稿にとって、巻十二を扱うことは手に余る。また、巻十二は相聞歌集であり、「雑歌」から旅の歌に絞ってきた本稿としては同じグループに含め難い。

むしろ本稿にとって今重要なのは、巻序の考察のために、氏による巻六と巻七の共通点の指摘をより詳細に詰めていくことだと思われるが、巻七には巻七と巻六をより具体的に近づける注意すべき例があるのである。まず一〇八九番歌を見ると、左注に「右一首伊勢従駕作」とあり、行幸従駕の歌とされている。万葉時代に伊勢行幸、あるいは、伊勢を通った行幸は持統六年、大宝二年、養老二年、天平十二年の四つがあり、一〇八九番歌の伊勢行幸の時期は不明だが、例えば、巻六には天平十二年十月の伊勢行幸時の歌（六・一〇二九）（三六）が載せられている。もちろん、この時の歌と巻七の一〇八九番歌が同時の作である保証は全くない。だが、巻七はそれ以上の情報を示さないのだから、それを否定することもできない。すると両者は同時の可能性を持つものと考えられていた可能性は否定できない。

また、「右七首者藤原卿作 未審年月」で括られる歌群（二二八）（二二、一一九四）（五）ではその可能性が更に高い。二二八番歌は「百磯城乃 大宮人」と歌い、また、「若浦」（二二一九）「玉津嶋」

（二二二）の地名から、この歌群が紀伊行幸に際しての供奉の歌々であることは間違いないと思われる。もちろん、この歌群も例えば巻六にある神亀元年の紀伊行幸歌（九一七）（九）と同時なのかどうか確定はできない。紀伊行幸といえど、大宝元年の紀伊行幸時の歌が巻九にあるが、巻七の七首の時期が、大宝元年なのか神亀元年なのかは未だに議論が決着していない。だが、玉津嶋、和歌の浦が注目を浴びるのは神亀元年の行幸時であるとの指摘もある。例えば村瀬憲夫氏は和歌の浦、玉津島を訪れた行幸は神亀元年の行幸の時だけであり、その時には聖武天皇による詔も出されているから、和歌の浦や玉津島が注目され始めるのはその時からであるとする¹¹⁾。従って、巻七の七首も神亀元年の作である可能性が高いように思われ、そうなると巻六の歌群との関係を窺うことができるが、これも確定するには今一步の材料が必要だろう。むしろ虚心に「右七首者藤原卿作 年月未審」を見れば、詠歌時は不明だったとしかやばりいようがない。ただ、それでも、歌の内容からはこの歌群が紀伊行幸において詠まれた歌の集まりであることは明らかなので、大宝元年、神亀元年のいずれかの紀伊行幸時の作品と考えられ、特に地名の点からは、巻六の歌群にも玉津島、和歌の浦が出ているため、巻六の歌群と同時の可能性が考えられていたのではないかと。となると、先の伊勢行幸歌の例とあわせて、これらの例は、巻七における、巻六と同時に確定はできないが、その可能性を否定もできないような歌の残存と見られた可能性がある。

他にも、例えば「芳野作」の一三三番歌は「皇祖神之 神宮人」と詠み、吉野行幸時の作品であることを窺わせる。そのため巻七「雑

歌」には、何らかの注がないものなにも、行幸供奉の作品がそれなりの数含まれていることは否定できない。高野正美氏は巻七は他の巻に収められている行幸従駕歌の流れに生じる八世紀初頭の空白期間に詠まれた行幸従駕、あるいはそれに準ずる状況の官人による旅の歌の集まりだとする。そして、そのような性格を示す具体的な現象として「飽かぬ」(二二二八、一一七七)や「万代」(二二四、一一三四、一一四八)などの「讃歌的要素」が巻七に散見されることを挙げている。

以上のような「雑歌」のボリュームの多さ、さらにそのなかでも公的な旅の歌の占める割合の多さ、また、具体的に同時の作品を含む可能性があることにより、巻七「雑歌」は巻六「雑歌」の作者不記版ともいえる性格を持ち合わせていると見られるのではない。部立構成のうえに、歌の内容、あるいは時期も両巻の特徴が一致しているのである。それならば、この両巻が今隣り合って置かれていることは説明が可能になり、巻序のうえで両巻をまとまりと見てよいということを示すのではないだろうか。

なお、既述の身崎氏論は巻六と巻七の共通点と両巻が隣接していることに触れているが、万葉集の大きな構造としては巻七が「巻六までとは決定的なことなる編纂原理」を持つていることに注目し、巻六までの諸巻と巻七の間に大きな断層があることも強調している⁽⁴⁾。確かに巻七が集中初の作者不記巻であることは大きな特徴である。ただ、本稿が目指す巻序論では断層を強調することよりも、巻の配列順序における秩序を問うことが重要である。巻序論を目的とすることを宣言するからには、巻七のその前の巻との相違点を認

めた上で、その巻七がなぜ巻六の後ろ、巻八の前に置かれているのかを考える必要がどうしてもあるのである。そして、その点から、本稿としては氏の指摘する巻六と巻七の共通点を巻序を理解するという目的のために生かしていこうとしているのである。

さて、このことと関連して本稿として当然述べなければならぬのは、両巻のうち、巻六が前、巻七が後ろに置かれている理由である。これまでは巻六と巻七が共通点を持ち、まとまりと見ることに妥当性があることを示しただけで、両巻の順序についてはまだ述べていないのである。そこで重要なのは、巻六と巻七は万葉集各巻の中で対等の関係とはいいたいということである。巻六は巻一「雑歌」の続編として、その正統性を受け継ぐ巻である。一方、巻七は部立も三大部立から崩れたもので、作者情報も持たない。すると、巻七は巻六に対して下位にある存在と考えるとよく、上述の共通点からいえば、巻七は巻六に対する付属的な巻であるということになる。なお、ここで「付属」は、例えば「組織上、主となるものについていること」という定義に従って用いることにするが、この場合の「組織」とは巻六と巻七によってできるグループであり、「主」とは巻六ということになる。そして、巻七は「主」である巻六がその位置にあるからこそ、その次の位置を与えられたと考えられる。それが反映されたのが今の巻序なのだろう。

では、巻七の後ろに位置する巻八はどうか。続いて考えていきたい。

四

従来巻八の編纂論は多いが、巻八が今ある位置に置かれている理由については議論が深められてはいない。例えば、同じく四季分類の巻である巻十との関係がいわれることが多いが、巻十とは巻序上隣り合わせになっていない。巻序の上では巻八と巻十はまとまりと見ようとしても見られないのである。従って、巻十との関係をいくら考えてみても、巻序を考察する上では行き詰まってしまふ。また、前後の巻七や巻九と特段に何らかの繋がりがあろうにも見えない。

しかし、巻八は巻六とならば共通点が見出せる。そして、もし巻七が既述のとおり巻六の付属的な存在であるなら、巻六と巻八を隔てるものはないのである。以下、具体的に考えていきたい。

横山英氏等によつて指摘されたように、巻三、四、六、八所収歌は時代的に重なる部分が多い。ところが、詳しく見ると、四巻の時代は決して同一ではない。巻六は奈良朝の歌しかなく、巻三、四(両巻で三大部立で「グループ」)¹⁵⁾と巻八の間でも古い時代の歌の占める割合は大きく異なる。もちろん巻八にも古い歌は収載されているが、巻三、四と比べればその比率はかなり低い。伊藤博氏によると、奈良遷都前の歌は巻三、四があわせて二二五首(五五八首の二二・四%)、巻八が二一首(二四六首の八・五%)となっている。特に巻三「雑歌」は半数近くが奈良遷都前の歌でその割合が高い。そのような「雑歌」を含む巻三、四では、古い歌の占める位置は、先程の全歌数に対する割合以上に大きいと考えられる。

一方、巻八では古い歌は一割以下であるし、各部立冒頭に置かれているごく古い時代の歌を比べても、巻三、四の場合は仁徳天皇代とされる歌(4・四八四)を含むのに対し、巻八の場合は最も古くて舒明天皇代の歌(一五一一)であり、ここからも、巻三、四に比べ、巻八では所収歌が新しい時代に偏っているといえる。

そこで再び四巻を見渡すと、巻三、四のグループから弾かれた巻六と巻八も、巻六は奈良朝の歌しか含まず、巻八も奈良朝の歌がほとんどであるから、両巻は単に弾かれて残ったグループという消極的な位置づけではなく、所収歌の年代という点で互いに近いという共通点を持つことになる。そして、それは集全体に対象を広げても変わらない。作者明記巻で、末四巻以外で奈良朝の歌が中心であるという特徴を最も強く持つのは巻六と巻八である。巻十六は時期が不明なものが多く、巻五や巻十五の時代も巻六、巻八の時代の範囲内に収まるが、巻五や巻十五はある特定の集団による歌の集まりというところに意味があるのであって、所収歌の時代はその結果に過ぎないと考えるべきだろう。従って、他の巻のように、広くある時代の歌を集めたということは同一に扱うことができない。その結果、巻六と巻八は所収歌の時代が集中で互いに最も近いということができ、これは取り上げるべき特徴ということになろう。確かに、巻八は、巻六と違い、若干の奈良遷都前の歌を含む。しかし、それは四季分類という斬新な分類のために、古い季節歌が入れられたとも考えられ、あくまで中心は奈良朝の歌々といえる。

特に、巻六は巻一「雑歌」を時代的に継ぐ部分であることが従来指摘されていることは既述のとおりである。ということは、巻六の

特徴としてその所収歌の時代は一つの大きな意味を持つていと思われ、その大きな意味のある特徴を巻八も同じく持つていことに注目してよいのではないか。

ただ、単に漠然と時代が共通しているというだけでは、まとまりの認定にはやはり弱い。そこで具体的に巻八内部の材料を探してみると、巻八には、巻八自身が巻六との同時代性を示していると思われる現象があるのである。それは、巻頭の志貴皇子歌（一四一八）である。当該歌は従来志貴皇子という人物に対する興味から説かれることが多かった。しかし、そのような問題は本稿の興味からは外れる。そして、そのような議論を措いた場合の最大の問題は、この歌を含む巻頭部の歌の配列状況であり、この配列状況が巻六との時代的な共通性をより補強するように思われるのである。

巻八巻頭部は、「志貴皇子權御歌一首」（一四一八）、「鏡王女歌一首」（一四一九）、「駿河采女歌一首」（一四二〇）、「尾張連歌二首」（名闕：小字）（一四二一）の順に並ぶ。一四二二番歌までをあげたのは、そこまでが奈良遷都前の作品と見られるという全注（井手至氏担当）などの指摘に従い、一つの区切りとして有効と考えられるからである。

さて、巻八全体の作品配列の原則は時代順の配列と見てよいようである。しかし、当該巻頭部は、一四一八番歌と一四一九番歌の順序が巻全体のそのような配列方針から外れている。このことについて、村山出氏は当該歌が「歌の配列順序を無視している」といい、「夏の雑歌中における皇子の歌の位置に照らして言えば、当面歌は当然鏡王女の歌の後に置かれるべきである。鏡王女は藤原鎌足の正室

であり、藤原夫人は題詞下注に記されるように鎌足の娘の一人、新田部皇子の生母大原大刀自であるから、皇子の当面歌の位置が異例なことは明白」だといっている。¹⁷⁾

「夏雑歌」冒頭部は「藤原夫人歌一首（明日香清御原宮御宇天皇之夫人也 字曰大原大刀自 即新田部皇子之母也：割注）」（一四四五）、「志貴皇子御歌一首」（一四六六）、「弓削皇子御歌一首」（一四六七）の順で、こちらは確かに時代順配列として適当である。そして、巻八巻頭部の配列の仕方は通常の配列方針から外れているといえるだろう。特に同じ志貴皇子歌がある「夏雑歌」が時代順配列として妥当であることは、巻頭部の配列の異例さを際立たせる。

さて、現象自体は明白なことであり、例えば村山氏が前掲論文で「巻八は古歌中でも由縁ある志貴皇子の歌を巻頭に据えることによって巻としての装いを整えようとしたのであって、ことは巻八の編纂意図にかかわるものである」というように、その巻頭部の配列の異例さが編纂上の意図と関わるものである可能性は高いといつてよい。そこで問題は、この現象がどのような編纂上の意図の表れであるかという点へ移る。

従来、その説明として最も強力に唱えられているのが、巻八の編纂を光仁天皇と関わせて説くものである。巻八は光仁天皇に献ずるために編纂された巻であるから、その親である志貴皇子の歌を巻八巻頭に持ってきたのである。そして、その根拠としては、吉永登氏が示したA「右一首依作者微不顯名字」（一四二八、左注B「高安歌」一首）（一五〇四、題詞）の二ヶ所についての指摘が大きいものである。氏はAについては「身分のある人すなはち天皇」

に見せるために、何らかの理由で名を載せるのを遠慮したとし、Bの「高安」とは「志貴皇子の妻であつた多紀皇女との密通」を犯した高安王のことであり、志貴皇子の子である光仁天皇の御代にあつては憚られる名であつたため「王」を除いたのではないかとする。しかし、例えばBについては、もしそのような事情であるならば、そこまでして高安王の歌一首を巻八に載せる必要はなかつたのではないかも考えられ、あるいは、Aと同じように名を顯さない方法をとることができたようにも思われる。従つて、これらをもつて巻八に光仁天皇を考慮した編纂の跡が窺えるとはいえない。そもそも、巻八の編纂時が不明な状況では、光仁天皇の存在を巻八編纂において考慮するのは論じ方としては難しい。

また、当該歌が春の到来を喜んだ歌で、秀歌だから巻頭に置かれたという説明がされることもある。例えば釈注は、「一首が万物の躍動を告げてとくに格調が高いこと」を、志貴皇子が古い時代の人物であることとともに、当該歌が巻頭に置かれた大きな理由のひとつとする。しかし、巻八は各季節内でその季節の推移に従つた配列をしているわけではないし、また、格調高いという基準も主観的である。万葉集で秀歌だからという理由で巻頭、冒頭に置かれた確実な歌をあげることができるだろうか。

以上のように、やはり集外部の状況や印象に頼つた説明には限界がある。従つて、巻八巻頭の配列の意図も万葉集の中で解決すべきだろう。

そこで注意したいのは巻一と巻二が志貴皇子が関つた歌で終わっていることである。巻一巻末歌（八四）は「長皇子與志貴皇子

於佐紀宮俱宴歌」の題詞を持ち、巻二巻末は志貴皇子挽歌（二三〇）である。どちらも志貴皇子に関わる歌であることが明らかである。もちろん、これが意図的な現象かどうかという問題があり、例えば、並木宏衛氏はこの現象は光仁天皇の孫にあたる平城天皇によつて巻一、巻二巻末部の増補がなされたためとするが、検証する手立てがない。

だが、巻一、巻二の巻末が志貴皇子と関わる歌であることは動かない事実である。整理すると、巻一、二という三大部立からなる一団の各巻の最後に志貴皇子関係歌があり、一方、巻八の巻頭は時代順配列という配列方針から外れて、志貴皇子歌で始められているということになる。すると、両者に何か関係があると考えるのは、それほど大それたことではないだろう。実際に、井口樹生氏は巻一、二巻末歌と巻八巻頭歌が同時に各所に置かれたと見る²⁰。ただし、その根拠は示されておらず、むしろ、そこを出発点として、主に巻八の成立年代を論じていく。しかし本稿は、この現象を、それらが同時に置かれたものなのかどうか、あるいは、いつ置かれたものなのかという現実的な段階で捉えるのではなく、巻どうしの関係を示す現象の一つとして理解することができないかと考えるものである。そして、そのような視点で見た場合、やはり、両者は強い結び付きを持つていると見てよいと思う。以下、考えを述べていきたい。

巻八所収歌の、巻一、二の「雑歌」統編である巻六との同時代性をここで再び思い出してみたい。すると、巻八巻頭の志貴皇子歌は、巻一、巻二巻末の志貴皇子関係歌と打ち合うことによつて、巻八が、時代的に巻一、二と連続するという特徴を持つことを自ら示す、一

種のサインと見ることはできない。結果として、これは巻六と同様の時代的特徴を持つことを巻八自身が宣言するものと見ることができ。そして、もしそれが認められるならば、それはとりもおさず、先に確認した巻六と巻八の所収歌の同時代性が意識されたことである可能性を示すことになる。これにより、単に漠然と同時代であるということ以上に、両巻に具体的な共通点を指摘することができる。

このように見るのは唐突かもしれないが、巻頭歌、部立冒頭歌には、巻やグループなど集中の他のある部分を参照し、その部分と繋がりを持つとした結果置かれたと見られるものがある。例えば、巻九「雑歌」冒頭の雄略天皇歌（一六六四）が巻一「雑歌」冒頭の雄略天皇歌（一）と打ち合っていることは従来指摘されている。すると、特に巻八巻頭部のようにその配列が通常の配列方針と比べて異例な場合には、巻頭歌、冒頭歌が何か特別な役割を持っていると考えられる可能性は高いのではないか。確かに、巻八巻頭歌の場合は、巻一と巻九のような冒頭歌どうしの対応ではない。しかし、そのような対応は冒頭歌どうしにしかないとする理由はないように思う。特に今の場合、巻八が巻一、二と時代的に連続することを示そうとしたものならば、巻末歌と巻頭歌の対応は自然ではないか。

巻六と巻八については、その収録歌の時代が集中で互いに最も近いということが、巻八巻頭歌の巻一、二巻末歌への対応を見るとより注目すべきことのように思われる。

五

さて、以上、巻八が巻六と時代という共通点を持ち、巻一、二の時代を継ぐという性格を持っていることを述べてきた。巻六と巻八は部立構成上の共通点はなく、ここで指摘できるのは時代という共通点のみである。しかし、その時代は奈良朝の歌を広く集めたという集中でも特徴的な共通点であり、また、巻八の巻頭歌によってそれが意識的なものであったとすることができる。そのため、まとめり認定のための共通点としてとりあげるに足るものであると思う。では、このことは巻序の問題にどのようなつながっていくだろうか。

共通点を指摘したうえで、まず、巻六と巻八の相対的な関係を明らかにする必要がある。巻六の性格は度々述べているが、巻八は巻一、二を時代的に継ぐという特徴が巻頭歌によって示されているとはいえ、公的な歌を特に集めようという意図は見られず、部立も、正統的な三大部立と異なり、四季分類を優先しその下に「雑歌」「相聞」を置くという異端ともいえる分類法を採っている。従って、巻一、二のような巻を正統とした場合、巻八は正統な巻の性格からは離れたものといえる。

そうなると、巻八と巻六の関係は、先に、巻七が巻六と共通点を持ちながらも、部立や作者情報の程度という点で巻六に従属的であると述べたのと同じような関係であるといえる。巻七が巻六と共通点を持っていたのと同様に、巻八も、巻一、二を時代的に継ぐという、巻六との共通点を持っているが、やはりどちらが主かといえは、

巻一「雑歌」を質的な点でも直接継ぐ巻六が主であり巻八が従となるのである。

以上のように考えると、巻七、八はいずれも巻六に対して従属的な位置にあると考えることができる。そうすると、巻序上、巻六の後に巻七と巻八が揃って置かれていることも理解でき、この三巻を巻六を中心としたひとまとまりと見ることができ。一方、後方を見ると、従来指摘があるように、巻九は巻一、二に対して極めて直接的につながる巻である。巻六と巻九は同じく巻一、二を継ぐ巻々であり、いわば対等な存在であるが、その間に挟まれた巻七、巻八は巻六に付属的な存在となる。整理して言えば、巻一、二に対して巻六、巻九は直接的な対応関係を志向し、巻七、巻八はその巻六に対して従属的な存在であり、それが巻序にも反映している。そして、巻六に従属的な巻は巻八までで終わり、巻九からはまた新しい段階に入ることになるうか。

では、巻七と巻八はなぜ今のような順序になっているのか。これについても巻序を論ずる上では何らかの理由付けが必要であろう。考えられる理由としては、巻七が、崩れたとはいえ三大部立に近い分類を施していることが、それ以前の巻々との関係で重視されたということがある。四季分類を導入することは、分類方法について枠組み自体の変更を要求するが、作者不記歌の集まりを作ることとは、従来の枠組みのまま作者名という一つの要素を落としただけと見ることもできるのである。

六

巻七を中心にして巻序の考察をしてきたが、巻七周辺の巻序は以上のように理解することができると思う。

では、このように理解することは、万葉集全体の巻序の理解にとつてどのような意義があるのだろうか。本稿の結論は、巻七、巻八は巻六に対して付属的な巻としてその後置かれており、それによりひとまとまりを形成しているということであった。このような主従の関係が見られる部分としては、もちろんはじめに触れた、巻一から巻四の部分があげられる。巻三、四は巻一、二の拾遺的な存在といえるから、ここはその主従の関係が巻序に反映したものだといえるだろう。また、これもはじめに触れた末四巻の位置も、末四巻がそれ以前の巻々に対して「従」であることによるのだろう。そうすると、万葉集の巻序形成上の論理のひとつとして、主となる巻に対する従属的な巻という組み合わせは、やはり巻序を考察する際には、意識され、留意されるべきものだろう。

巻八の次は巻九であり、その後の巻序も一筋縄ではいかないが、巻六と同じく巻一、二との強い関係が指摘され、大量の私家集歌により巻一、二の再現を図ったともいえる巻九の後に同じく集中でも最も目立って私歌集歌を大量に取る巻十・十二が置かれているのもこのような主従の関係によつて理解できるかもしれない。今後、他の部分においても、あるいは様々なレベルで、このような論理を考慮することにより、巻序に秩序が見出される場合も出てくる可能

性があろう。

(注)

- (1) 伊藤博「万葉集釈注 十一 別巻」(平成十一年三月)より引用。なお、詳細は既に『万葉集の構造と成立 上』(昭和四十九年九月)で論じられているが、引用の便のため釈注より引用した。
- (2) 渡瀬昌忠「人麻呂歌集非略体歌における季節分類——万葉集巻八への投影——」(『渡瀬昌忠著作集第三巻 人麻呂歌集非略体歌論上』所収、初出昭和四十三年五月)
- (3) 身崎壽「万葉集の構造と成立——巻八・一〇をめぐる——」(『和歌文学講座第二巻 万葉集Ⅰ』、平成四年九月)
- (4) 身崎壽「万葉集巻七論序説」(『万葉集研究』二七、平成十七年六月)
- (5) 賀茂真淵「万葉考」(『別記』、井上豊編『賀茂真淵全集』(統群書類従完成会)より引用)
- (6) 横井博「万葉集の季節歌と季節語」(『万葉集を学ぶ』五、昭和五十三年六月)
- (7) 村瀬憲夫「万葉集巻七と巻十の編纂——特に巻七の季節歌をめぐる——」(『万葉集編纂の研究 作者未詳歌巻の論』所収、初出昭和五十三年七月)
- (8) 森本治吉「万葉集第九巻考」(一)「『国語と国文学』五一—二、昭和三年十二月)
- (9) 森本治吉「万葉集巻七考」(『国語と国文学』四一八、昭和二年八月)
- (10) 金井清一「万葉集全注 巻第九」(『概説』)
- (11) 村瀬憲夫「和歌の浦・玉津島の覚え書き」(『紀伊万葉の研究』所収、初出平成二年二月)
- (12) 高野正美「万葉集巻七行旅歌群——制作時期をめぐる——」(『万葉集作者未詳歌の研究』所収、初出昭和五十年三月)
- (13) 『例解新国語辞典 第六版』
- (14) 横山英「万葉集巻三・四・六・八の関係」(『万葉私考』所収、初出昭和七年十月)
- (15) 品田太吉「万葉集両巻説」(『心の花』一七一〇、大正二年十月)など
- (16) 伊藤博「万葉集釈注 十一 別巻」(平成十一年三月)
- (17) 村山出「志貴皇子の歌——「懽御歌」の解釈の視点の検討——」(『国語と国文学』五九—一、昭和五十七年十一月)
- (18) 吉永登「万葉集巻八編纂の意図とその時について」(『国文学』(関西大学)二八、昭和三十五年一月)
- (19) 並木宏衛「万葉集巻一・二の論(上)——「寧楽宮」の標目について——」(『武蔵野女子大学紀要』一〇、昭和五十年三月)
- (20) 井口樹生「巻八成立の背景」(『上代文学』五二、昭和五十九年四月)
- (21) 森本次吉「万葉集第九巻考」(『国語と国文学』五一—一、昭和三年十一月)、(8) など

(やまだ ひろき・HANBAT 大学(韓国))